

# ラテン語由来動詞形成における生産性の制約条件

西川 盛雄

## Some Constraints of Productivity in Linate Verb Formation

Morio NISHIKAWA

(Received September 2, 2002)

We acknowledge that many English words have been diachronically borrowed and inherited from Greek, Latin and French. The delicate history of the mixture of race and culture, and therefore of language, caused English to change itself in form and meaning to a great extent in the course of its development. The present paper represents research on some morphological constraints of productivity in English Linate Verb Formation. We first propose three kinds of word elements; LF (Lexical Form), CF (Combining Form), and AF (Affixal Form) instead of the conventional binary distinction between free and bound morphemes. The concept of CF is highly considered in this paper. English linate verbs such as *conceive*, *project*, *permit* consist primarily of a linate prefix (LPref) and a linate combining form root (LCFRoot). A linate combining form has semantically [+contentive], morphologically [+bound morphemic] and phonologically [+primary stressed] features. According to the morphological principle of Righthand Head Principle and Percolation, the relevant and grammatical combination of LPref and LCFRoot is due to the preservation of the principle of etymologically equal word elements. A phonological stress is commonly placed upon the following word element of LCFRoot. However, we also point out that some types of pronunciation in such pairs as *súbject*/*subyéct*, *cónduct*/*condúct* function well in terms of the grammatical markedness or unmarkedness. We also give a statistical analysis of the distribution of the combination of LPref and LCFRoot in English, referring to the statistic tables and their graphic chart. We finally indicate that some types of combination of LPref and LCF are more productive and other types are less.

**Key words :** *Productivity, Linate Combining Form, Linate Prefix, Root, Hybrid*

### (1) はじめに

語形成の構造的過程 (morphology) であれ, 文形成の構造的過程 (syntax) であれ, 言語を共時的な構造にのみ限って研究するだけでは生きた言語の相は十分見えてこない. 21世紀の言語学では通時的・歴史的な視点をどう考慮するかという点が今後ますます必要になる. 言語変化を音変化, 意味変化, 文法範疇の変化等みていく中で単に形式的, 構造的記述だけでは十分説明できない言語現象が多く, 特に Hopper & Traugott (1993), Traugott & Heine (1991) らの文法化現象 (grammaticalization) の視点が本格的に提出されてから以後は共時・通時の両機軸は相補的にま

---

本研究は平成14年(2002年)度日本学術振興会科学研究費補助金, 課題番号14510531の指定を受けた研究成果の一部である.

すます重要になって来ているといえよう<sup>1)</sup>。

Barber (1997) はこの間の事情を背景に簡潔に古フランス語を経てブリテン島に入ったラテン語・ギリシャ語の優位性がやがて英語に吸収され、やがて現代の英語に成っていく過程を歴史的な文献、特に文献を著した著者たちの序文に触れて詳しく説明している。トーマス・モアの *Utopia* を代表格として長らくラテン語が用いられていたが次第に英語自体がその潜在的な機能を開花するかたちで 17 世紀以降の英語の発展があったとするのである<sup>2)</sup>。

ギリシャ語、ラテン語が古フランス語を経て英語に入り、やがて現代英語の語彙の豊かさに貢献していることはいうまでもないが、その全体英語語彙のなかでギリシャ語、ラテン語系統の語の占める割合は想像以上に大きい。接辞に関してはすでに Nishikawa (1999) において *American Heritage Dictionary, Third Edition* (AHD3) の記述を元にギリシャ語系 41.3%、ラテン語系 36.4%、アングロ・サクソン系 15.7%、多起源のもの 4.1%、その他 2.5% という数字を提出している。このことは英語は元来混交によって成る Pidgin あるいは Creole 性をもった言語として通時的に変容を重ね、今日までたくましく生き延びてきた言語であったことが予測できる<sup>3)</sup>。それゆえに、英語におけるギリシャ語やラテン語由来の語形成上の諸相を調べていくことによって合成によって成る英語語彙の実際の姿を垣間見ることができるに違いない。

語形成要素のうちラテン語由来の語根 (Root) をもった形態素の振る舞いについての辞書記述は興味深い。例えば、*Anglo-agri-arch-socio-* などは接辞 (Affix) として記述している辞書もあれば<sup>4)</sup>、連結辞 (Combining Form) として記述している辞書があり<sup>5)</sup>、辞書によって list (記載) のされ方が異なっているのである。Adams (1973) がすでに Neo-classical Compounds として *insecticide, pesticide, homicide* の *-cide*, *democracy, aristocracy* の *-cracy* などを例示して接辞の枠にはまらない語形成要素のあることを指摘している。いうまでもなく彼の場合、語の文法範疇を動詞に特定化しているわけではない。事実、*psycho-logy, cardio-graph, penta-gon, mon-archy* などのそれぞれの語形成要素は辞書では連結辞として list されている場合が多い。*chemistry, alchemy, chemigraphy* の *chemi-*, *vibraphone, vibrograph, vibraharp* などの *vibr-* などは形態論的な生産性 (productivity) は高くないが、(i) 意味論的には contentive であること (ii) 形態論的には語形成要素として拘束形態素 (bound morphemic) であること (iii) 第一強勢 (primary stress) を取りえる、といった特徴を兼ね備えている。

Katamba (1993) は形態素の自由性と拘束性についての説明の際、全ての意味論的、範疇論的にかつ機能論的に核となる語根 (Root) が自由形態素ではない例としてラテン語由来の語根をいくつかあげている。歴史的にさまざまな言語の混交体系をもつ英語には、本来のアングロ・サクソン系の英語よりもギリシャ・ラテン系の語が古フランス語を経て英語に入ってきた事例が多いことを見据え、英語には語形成の核であるラテン語由来の語根が多くあり、音声学的に第一強勢を取り、同時に拘束形態素であるものが存在していることを次のような例をあげて指摘している。

- (1) -mit as in *permit, remit, commit, admit*  
 -ceive as in *perceive, receive, conceive*  
 pred- as in *predator, predatory, predation, depredate*  
 sed- as in *sedate, sedent, sedentary, sediment*

(Katamba 1993: 42)

ここで *-mit* は英語では “send, let go, do”, *-ceive* はそれぞれ “take” を表すラテン語動詞 *mitere*,

capere から来ている。per-mit は “thoroughly + let go” の合成で per-ceive は “thoroughly + take” の合成でそれぞれにラテン語由来接頭辞 (Latinate Prefix) の per- (thoroughly, completely) が付いている。Pred- はラテン語で praedāri で動詞 “plunder” を意味する。Sed- は同じくラテン語の sedere から来ており動詞 “sit” を含意した意味合いで用いられ、それぞれにラテン語由来接尾辞 (Latinate Suffix) が付与されているのである。

この種の合成は動詞であったラテン語由来の語根 (Root) の前後にラテン語由来の接辞が付加されたものである。そして英語の語形成過程においてはその実例も多い。本稿ではラテン語系の動詞語根や接辞がいかに深く英語に入り込み、そこにはどのような形態論的な原理あるいは制約が働いているのかについて考察を加えていきたいと思う。

## (2) 語形成要素

英語の語形成過程には多くの工夫 (device) が関与している。語は単独のものより幾つかの語形成要素が合成されたり省略されてできたものが多い。例えば派生 (derivation), 複合 (compounding), 転換 (conversion), 再分析 (reanalysis), 混交 (blending), 短縮 (clipping), clitic, 逆成 (back-formation), 頭字法 (acronym), cliticization, reduplication などその相はさまざまである。ここでは派生と複合を中心に英語における語形成要素の合成モデルについて考察を加えてみたい。

語形成要素 (word element) にはアメリカ構造主義の時代から大きく二つの形態素 (morpheme) があるといわれてきた。形態素には意味内容が示されている自由形態素 (free morpheme) と、それが接頭辞であれ接尾辞であれ自立性はないが、文法的な機能がまった拘束形態素 (bound morpheme) といわれるものである。前者は語根 (root) を形成し、文中で自立した文法範疇をもち単独の語として用いられ得るものである。後者は語根を形成せず、文中で自立した語としての範疇と機能を果たすことのないタイプの語形成要素である。しかしこの二分法はあまりにも粗い分け方である。例えば接辞が拘束形態素であるとしたら接辞として用いられる *under, over, up, down*<sup>6)</sup> などは自由形態素として句の中で自在に用いられている事実と矛盾する。自由形態素である *fashion, step, person* などは *Indian-fashion, step-mother, chair-person* などとして用いられる場合は接辞としての拘束形態素であるといえる。いずれにしてもこの二分法では英語の合成による語形成過程を説明するには不十分である。

しかし、この二分法に基礎をおいて項目記載している辞書が、*Longman Dictionary of Contemporary English* (LDCE) と *American Heritage Dictionary* (AHD) である。両辞書は接辞 (affix) と語 (word) の間にあると考えられる連結辞 (combining form) の概念/用語を認めず、これを辞書に list していない。このことは両辞書が英語語彙の形態論的な実像を正確に説明しているかどうか、あるいは辞書記述者の利用者への心配りの点からみて十分ではないのではないかとと思われる。

語根は morphological base として旧来自由形態素として一般に考えられてきたが、拘束形態素として機能する語根は主としてラテン語・フランス語を経由して英語に入ってきたラテン語由来動詞の語根においてはっきりとみられる。これをも含むかたちで語形成要素を考えていくとき、連結辞の存在は不可欠になると思われる。そこで本稿では語形成要素を以下の語彙形式 (LF: Lexical Form), 連結辞 (CF: Combining Form), 接辞形式 (AF: Affixal Form) の3つに分けて考え

ていきたい。

(2) a. 語彙形式 (LF: Lexical Form)

(Ex) content word: *friend virtue walk move become sane*

function word: *under over in and but or since because*

b. 連結辞 (CF: Combining Form)

(Ex) *Anglo- arch- hydro- hemis- chrono- cardi-*

*-graph -(o)logy -gon -scape -meter -cide*

Latinate CF: (*-duct -vide -cede -mit -posse -vive -voke*)

c. 接辞形式 (AF: Affixal Form)

(Ex) prefix: *un- en- de- dis- fore- be- mis- re- a-*

suffix: *-ment -ful -ity -ly -al -less -er -ure*

語彙形式 (LF) は (2a) などのように文 (句) 中においては独立した語としての機能を有するものである。内容語 (content word) においては名詞や動詞が典型的に存在し、機能語 (function word) においては前置詞や接続詞や冠詞などがその典型である。連結辞 (CF) は (2b) のように機能は拘束形態素であるが、意味内容の solid 性は保持しており、強勢 (stress) を取る場合が多い。特にここで問題にしているラテン語由来動詞の語根 (latinate CF) は明確に CF の概念の必要性を証していると思われる。これは概ね語源的にかつては自由語彙形態素であったものが文法化現象 (grammaticalization) によって機能変化や意味変化を起し、今日に至っている場合である。接辞形式 (AF) は (2c) のように英語では主として *un-*, *en-*, *dis-*, *re-*, *-de* のような prefix と *-ment*, *-ness*, *-ly*, *-ful*, *-ity* などのような suffix とがあるが、いずれも機能性に富む拘束形態素であり、かつ強勢 (stress) を取る場合はむしろ少ない。CF, AF の両者はかつて LF としての範疇と機能をもっていたが通時的に文法化現象において徐々に範疇 (品詞) 変化や機能変化を起し、意味的希薄化 (semantic bleaching) を起し CF 化したり AF 化したりしていったものであると考えることができる。

これら3つの語形成要素の特徴 (feature(s)) は一般的に具体的な名詞や動詞のように意味論的に意味内容 (semantic content) が solid に存在しているかどうか ([±contentive]), 統語論的に文 (句) の中で語の連結 (concatenation) においてその文法的な範疇 (category) と機能 (function) において自立性が確保されているかどうか ([±independent]), さらに音声学的に強勢 (stress) を取りえる ([±stressed]) かどうかを分類の柱とすれば次のような表でこれを表すことができる。

[Table 1]

	[± contentive]	[± independent]	[± stressed]
LF (Lexical Form)	+	+	+
CF (Combining Form)	+	-	+
AF (Affixal form)	-	-	-

本稿で問題にするラテン語由来語源の語形成要素の動詞語根は連結辞 (以後 LCF と略記する) である。例えば, *-ceive*, *-duct*, *-fer*, *-ject*, *-mit*, *-vide*, *-vive*, *-volve* などそれぞれにすべて

[+contentive], [+stressed], [-independent] の特徴をもつ LCF であり, それ独自で文 (句) 中で用いられることはない. 次の例はこの LCF に同じくラテン語系の接頭辞 (以後 LPref と略記する) が付与合成されたものである.

- (3) *re-ceive ab-duct pro-ject pro-vide oc-cur trans-fer pro-voke*  
*ad-mire ex-pect in-volve con-vert sur-vive ab-sent pro-cede*

大石 (1988: 13-14) も言うように CF が *Anglo-phile, homo-phile* のように複合語を構成する自立した語彙素のように取り扱われているが, *Anglo-, -phile, homo-* はそれぞれ拘束形態素であって自立した語とはいえない<sup>7)</sup>. CF 結合においては接頭辞, 接尾辞との結合もあるが, CF + CF の結合形態も存在する. これは同一価値を有する語同士の結合であり, Compound Stress Rule を守っている限りにおいて複合語の一種と考えられる. しかしながら, 上の (3) でみるような例の場合には先行する要素は接頭辞としての拘束形態素であり, かつ強勢が後半のラテン語由来動詞の上に来ている以上, これらは複合語を形成しているとは言えない.

### (3) 語形成要素のモデル

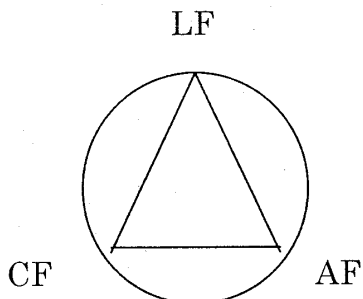
上で述べた LF, CF, AF 3 つの語形成要素の合成の在り様を円形モデルとして明示することができる. 組み合わせは LF+CF, LF+AF, CF+LF, CF+AF, AF+LF, AF+CF の 6 つがまず考えられる. 次に語形成要素それぞれが同等の LF+LF, CF+CF, AF+AF の結合関係が考えられる. すると語形成過程においては次の 9 種の可能性が考えられる. 例を添えて次に示してみたい.

- (4) a. LF+CF: *duty-free south-bound fire-proof newsworthy*  
 b. LF+AF: *friend-ly agree-ment kind-ness simpli-fy employ-ee*  
*happily active elevator modernize refusal*  
 c. CF+LF: *agri-culture neuro-science tele-cast aero-space*  
 d. CF+AF: *phonic technical phobic doctor floral local*  
 e. AF+LF: *en-large de-frost un-fold a-moral in-sane re-turn*  
*dis-grace ex-wife pre-view be-seat*  
 f. AF+CF: *ab-duct per-mit in-volve con-tact sur-vive trans-fer*  
*com-bine re-fer pro-vide a(d)-tend*  
 g. LF+LF: *steam boat black board dumb-mute sleep-walk*  
*undergo city-dweller heavy smoker*  
 h. CF+CF: *cardio-graph penta-gon tele-graph thermo-meter*  
*astro-naut tele-scope techno-phobe Anglo-phile*  
 i. AF+AF: *uni-fy ultra-ism*

ここでまず (4b) は接尾辞化 (suffixation), (4e) は接頭辞化 (prefixation) の一般的なケースであり, (4f) は LCF と LPref の合成が典型となる例であることを確認しておきたい. (4a)(4c) の例は CF の概念規定によっては複合語に近くなる特徴をもっているといえる.

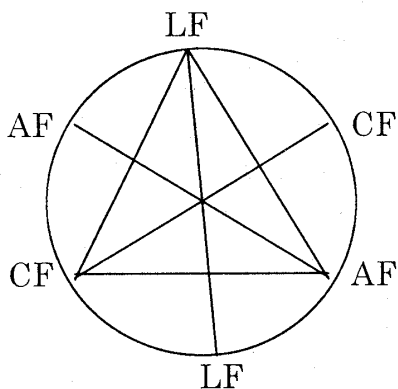
いま LF, CF, AF それぞれを頂点として円弧の上にこれを取って互いに結んでみると双方向性において LF---CF, CF---AF, AF---LF の三つの可能性の関係が成立している。これを三辺とする三角形を円内に描いて明示すると次のようになる。

(5)



ここでさらに LF+LF, CF+CF, AF+AF の結合もあるわけであるが、筆者はこの三種類の結合のそれぞれを複合語として考えていきたい。旧来 LF+LF の自由形態素結合が複合語として考えられてきたが、(4h)(4i) それぞれに見るように CF+CF, AF+AF の結合様式が現実に存在するにもかかわらず、この種の結合様式は宙に浮いてしまっていた。しかしこれらは同等の語形成要素の合成において、また複合語の強勢ルール (Compound Stress Rule) を守っている限りにおいて複合語として分類することができはしないか。これを図で示す場合、上記の円形モデルにおいては、CF, AF 同士の結合において後位に来る語の位置を対極においてみると (5) はさらに次のように elaborate することができる。

(6)



ここで、LF は一方で CF, AF への合成方向をもち、同時にその対極で LF につながり複合語を形成する。また、CF は LF, AF への結合方向をもち、同時にその対極で CF につながり連結辞 (CF) 複合語を形成する。さらに AF から見ると、AF は LF, CF への結合方向をもち、同時にその対極で別の AF につながる接辞 (AF) 複合語を形成するといえる<sup>8)</sup>。

## (4) 三種類の複合語

英語における複合語は語による合成過程においては特に重要な役割を果たす。語形成要素が LF に限られている間は構成的には問題はないようであったが、語形成要素が CF, AF にまで細分化していくと当然のことながら LF, CF, AF 同士の結合様式が問題にされなければならなくなる。OALD6 によれば, *Anglo-phile*, *cardio-graph* は両構成要素とも CF である。 *ultraism*, *unify* では両構成要素とも AF である。従ってここでは CF+CF, AF+AF の合成が実現している。

複合語 (compounds) は基本的に LF+LF の結合において右側主要語の原理を守りながら語構成要素から全体の意味を予測することの可能な内心複合語 (endocentric compounds) にしても、語構成要素から全体の意味を予測することが難しく、イディオム性をもった外心複合語 (exocentric compounds) にしても、また二番目の語形成要素に動詞を内含している動詞由来複合語 (verbal compounds) も基本的に自由形態素同士の結合によってなる新しい語であった。しかしこれまで拘束形態素同士の結合は特に取り上げて語形成上の位置付けはなされて来なかったように思われる。筆者はこの拘束形態素同士の結合もまた複合語の一種と考えたい。その理由のひとつは CF+CF, AF+AF の語は実際に存在しており、しかも強勢 (stress) の付与においては以下の例のように前位の音節に強勢が置かれるという Compound Stress Rule を遵守しているからなのである。以下の (7) で見るとように CF+CF タイプの複合語を連結辞 (CF) 複合語, (8) で見るとような AF+AF タイプの複合語を接辞 (AF) 複合語として分類しておきたいと思う。

## (7) CF+CF: [連結辞複合語 (CF Compound)]

*cardio-graph* *téle-phone* *astro-naut* *náno-gram* *mátri-cide*  
*hýdro-cel* *hémi-sphere* *sýn-rome* *máni-fold*

## (8) AF+AF: [接辞複合語 (AF Compound)]

*únify* *últraism*

結果として上に見るように (7) の例は少なからずあり、(8) の例は少ない。しかし語の分類としては (7)(8) それぞれの例も CF, AF 同士の結合において複合語を形成しているといえる。

## (5) LCF (Latinate Combining Form) 形成の条件

ラテン語由来語源の連結辞は例えば *abduct*, *inject*, *admit*, *confer* などのように構造的には以下のようにラテン語由来の語根 (LCF) の前にラテン語由来の接辞 (Laf:Latinate Affix) をとる。ここで Laf は LPref である。これは結合によって新たな語を合成する際には同語源の語形成要素同士が結合し易いという傾向の結果である。これを以下のように「同一語源保持の原理」と呼んでおきたい<sup>9)</sup>。

- (9) a. ラテン語由来動詞における語根 (LCFRoot) と接辞 (Laf) の結合においては同一語源保持の原理が働いている。

- b. [Laf + [LCFRoot]] as in  
 [in-[-ject]], [pro-[-vide]], [per-[-mit]], [con-[-fer]]

ここで注目しておくべきことは、[LPref] も [LCFRoot] 両者とも同じラテン語の語源をもち、それ以外のたとえばアングロ・サクソン語の語形成要素とは容易に合成されない、ということである。\*unject, \*unvide, \*unmit, \*unfer などはいかにも起りそうにない。しかしそれ以外の結合においては語源の違う語形成要素同士結合として語源的な混交 (hybrid) があるがこのことについては後に述べる ((6) を参照)。

さらに LCF については productivity が低く、調査してみると概ねこの種の接頭辞の代表的なものは以下のようなものである<sup>10)</sup>。そしてこれらはすべてラテン語由来の接頭辞 (LPref) である。それに対応する英語の意味は以下の<>にみられるように前置詞、あるいは副詞的小辞 (adverbial particle) に相当する。他にも可能性はあるが LPref としてよく見られ代表的と思われるものを以下の 15 種にまとめてみた。

- (10) a. *ab-* <off, away>: *abduct abject abstract absurd abhor*  
 b. *ad-* <toward>: *adjoin adjunct admit advance adhere*  
 c. *con (m)-* <together, with>: *conduct contract commit conceive*  
 d. *de-* <out of>: *deceive deduce delude depend detain*  
 e. *dis-* <absence, remove>: *disclaim dispose dismiss dispense*  
 f. *e(x)-* <out, out of>: *expect expose extract extend extrude*  
 g. *in-* <in, into>: *incur induct inject insert infer*  
 h. *ob-* <toward>: *object observe obtrude obstruct omit*  
 i. *per-* <thoroughly, completely>: *perceive permit pertain pervert*  
 j. *pre-* <before>: *preserve pretend prefer prevail prevent*  
 k. *pro-* <forward, advancement>: *provide produce proceed project*  
 l. *re-* <backward>: *receive reduct reject retain revenge revise*  
 m. *sub-* <under, below>: *subject submerge submit subscribe subtract*  
 n. *sur-* <above, over>: *surpass surprise surrender survive*  
 o. *trans-* <across, beyond>: *transform transfer transmit transcend*

さらに LCF と LPref との結合の可能性は限られており、ここでは (10) でみたように LPref と LCF との合成は可能であることはみたが、(11) のように LCF がこのまま接尾辞を取ることの少ないことは指摘しておきたい<sup>11)</sup>。

- (11) \**ceivable* (*conceivable*) \**ference* (*reference*) \**duction* (*production*)  
 \**jection* (*injection*) \**vival* (*survival*) \**spectant* (*expectant*)

#### (6) ラテン語由来動詞の合成

さらに全てではないにしてもラテン語由来の動詞 (LCF) とラテン語由来接頭辞 (LPref) の



結びつきの全体の意味の推測はその要素同士の意味が分かっておれば比較的透明なもの (transparent) である。その分だけ構成要素から全体の意味を推測できる可能性は高いといえよう。いうまでもなく合成された意味はゲシュタルト的に要素分析によって十分説明できる訳ではないが、推測の可能性の度合いは比較的高いといわなければならない。例えば inject は <(in-(in) + -ject(throw))>, expect は <(ex-(out) + -spect(see/look at))>, contact は <con-(together) + -tact(touch)> として考えられる<sup>12)</sup>。

語形成要素の合成においては原理的に語源的に同じもの同士が合成されるのが恒であるが、時に異なるものが組み合わされる場合がある。語源的に異質なものの混交である。例えば、beautiful については、これはフランス・ラテン系の “beauty” とアングロ・サクソン系の接尾辞 “-ful” が結合されたものである。本来ラテン語系同士の結合においては imbalanced であるが un- というアングロ・サクソン語で非常に生産性のある接頭辞と合成されて hybrid の unbalanced も可能になったのである<sup>13)</sup>。

ラテン語由来動詞の場合はギリシャ語とラテン語の hybrid のケースが多く見られる。例えば次のような例である。

- (12) a. television [tele (Gk) + vision (L)]  
 b. aero-navigation [aero (Gk) + navigation (L)]  
 c. autosuggestion [auto (Gk) + suggestion (L)]  
 d. physiotherapy [physio (Gk) + therapy (L)] (Adams 1973: 129)

これらはすべて [Greek + Latin] の結合の例であるが長い英語の歴史のなかで、また実際の人々の生活と時代の必要性において新しい語彙がさまざまな形で合成され、共有され、定着していったのである。

ラテン語由来動詞形成 (LCF) においては前に来る接頭辞 (LPref) は基本的に Siegel (1974) や Allen (1978) のいうクラス II タイプの接辞として機能する。元来ラテン語動詞が英語に入って語尾の水平化 (leveling) などによって語形式の変容を受けはしたものの、形成された語全体における強勢は Head の動詞の側にあり、接頭辞の側にはない。そして右方主要語の原則 (Righthand Head Principle) は守られている。この限りにおいてここでの接頭辞は原則的に語全体の発音 (強勢) に影響を及ぼすことはないのである。

さらに Katamba (1983:91) のいう、例えば語 *addle* [ædl] や *adduce* [ədju:s] といった gemination, つまり文字の二重化 (doubling) はあるものの発音では二重化は起らない例があるが、このような例の変異が [LPref+LCFRoot] においてもみられる。発音において、LPref の終わりの子音が Root である LCF の最初の子音に影響されて同化 (assimilation) するか前者が消えて後者に融合 (fusion) される場合がそれである。例えば、前者の例として *attend* は [ad+tendere], *suppose* は [sub+pōnere], *oppose* は [ob+pōnere], *allude* は [ad+lūdere], *acclaim* は [ad+clāmāre] である。後者の例としては *omit* は [ob+mittere], *emit* は [ex+mittere], さらに興味深い例として *sustain* は [sub+tenēre] で [b → s] 交替が起り, *seduce* は [sub+dūcere] で [əb] が [e] に交替している例もみられる。

## (7) 強勢のシフト

強勢の移動に関わって接辞には二種類ある。一つは Katamba (1994) に従えば *neutral affix* いま一つは *non-neutral affix* である。前者はこれを付加することで音声学的変化、特にストレス・シフトを起こさない場合であり、後者は明示的なストレス・シフトを起こす場合である。例としては前者はアングロ・サクソン系の *native English* に多いが、後者は *latinate English* に多いといわれている。前者の *-ly* (*happily, friendly*), *-less* (*careless, motherless*), *-ness* (*tenderness, cowardness*) などは *neutral affix*, 後者の *-ian* (*Canada--Canáidian*), *-ic* (*fantasy--fantástic*), *-(i)fy* (*persón--persónify*) などは *non-neutral affix* である。ラテン語由来動詞語根 (LCFRoot) に付与される接頭辞は基本的に全体が動詞のカテゴリーを守る限りにおいて次に来る LCF にある強勢の位置をシフトすることはない。しかし (14) のように明示的なストレス・シフトを起こす場合はこれらのラテン語由来の接頭辞は *non-neutral affix* としなければならない。

ここで思い出されるのは Kiparsky (1982) の *Hierarchical Strata (Levels)* の概念である。彼は語形成における接辞の付与において *Stress* のシフトがあるものとそうでないものを分けて、概ね *Stratum I* のタイプと *Stratum II* のタイプに分けた。前者は *non-neutral affix*, 後者は *neutral affix* で代表されるものである。

ラテン語由来の動詞にあっては第一強勢 (*primary stress*) は右側の文法範疇を引き受けかつ語の情報の核になる重要な部分を引き受けている *lexical head* の方にあり、したがってまた *Percolation* の原則により動詞というカテゴリーを維持する拘束形態素である LCF の方にあるといえる。例としては以下にみるように後ろの語根の方に第一強勢が来るのが無標性 (*unmarkedness*) をもって自然である。この場合は *neutral affix* の例としてある。

(13) *condúct* *abdúct* *admít* *objéct* *percéive* *províde* *refér*  
*transfér* *persíst* *présént* *insért* *extrúde*

しかし興味深いことにこの種のいくつかの動詞は転換 (*conversion*) によって名詞あるいは形容詞になるときは以下にみるように接辞形式の付与にはいっさい依存することなく強勢の位置が前にシフトする。この場合は文法的に有標 (*markedness*) になり、以下のように *non-neutral affix* の例となる<sup>14)</sup>。

(14) *subjéct*            *súbject*  
*objéct*                *óbject*  
*absént*                *ábsent*  
*suspéct*               *súspect*  
*condúct*               *cónduct*

ここで左側コラムの動詞の場合、後位のラテン語の [Root] に強勢があるのは前位の接頭辞に比べて [Root] がラテン語においては元來動詞であり、情報的により重要な意味内容を引き受け、*Percolation* の原理が働いているからである。ちなみに *-ject* は “throw”, *-sent* は “feel”, *-spect* は “look”, *-duct* は “lead” を表すラテン語の動詞である。

これに対応して右側のコラムの語のように接辞をいっさい付けずに品詞を変えようとする場合、後位の [Root] から動詞性を消し去らねばならず、名詞あるいは形容詞としての有標性 (markedness) を実現するためには残された可能性は強勢の位置を前位にシフトすることであった。これは明示的なストレス・シフトを起こす場合の例である。このことは強勢のシフトがカテゴリー変容にいかに関与しているかの証拠となる。

### (8) ラテン語由来動詞の特徴

これまでラテン語由来動詞の構造的側面をみてきたが、ここではこの種の動詞はどのような特徴があるかをみてみたい。一見、一つの自立した語のように思えるが、実はラテン語の前置詞と動詞の語幹との結合がこの種のラテン語由来動詞と言われる種類の動詞を英語は作り出してきたのである。次の表を見ていただきたい。ここでは、部分的ではあるが、LCF のラテン語の元の形式とそれに対応する英語の単語を対照させて示してある。次に代表的な例をひとつ示したあと、どのような prefix が付くのかについて幾つかの例を示しておいた。

[Table 2]

LCF	Latin	English	Examples	Prefixes
-duct	dūcere	lead	<i>conduct</i>	ab-, in-, pro-
-ceive	capere	get, take	<i>conceive</i>	Per-, de-, re-
-ject	iacere	throw	<i>project</i>	in-, ob-, sub-
-mit	mittere	send	<i>admit</i>	ex-, sub-, com-
-fer	ferre	bring	<i>confer</i>	Pre-, in-, re-
-tact	tangere	touch	<i>contact</i>	in-,
-duce	dūcere	lead	<i>produce</i>	in-,
-tain	tenere	hold	<i>contain</i>	ad-, de-, ob-
-cede	cēdere	go away	<i>precede</i>	Pre-, re-, con-
-vive	vīvere	live	<i>survive</i>	re-,
-voke	vocāre	call	<i>revoke</i>	ex-, in-,
-serve	servāre	save	<i>preserve</i>	Con-, re-, ob-
-quire	quaerere	seek	<i>inquire</i>	re-, ad-
-volve	volvere	roll, turn	<i>involve</i>	re-,
-tend	tendere	stretch	<i>extend</i>	in-, pre-, con-
-sent	sentīre	feel	<i>consent</i>	re-, ad-
-lude	ludere	play	<i>elude</i>	ad-
-port	portare	carry	<i>export</i>	im-, de-, sub-
-vide	videre	see	<i>provide</i>	pro-
-vive	vīvere	live	<i>survive</i>	re-

左端の欄はいずれも身近な LCF で、元はラテン語の動詞であった。これらを見た限りでは存在や自発・発生を表す非対格 (unaccusative) 動詞はここには現れて来ない。むしろ動作性 (action/activity) を表す非能格 (unergative) 自動詞か行為/動作を表す他動詞である。ここにはラテン語から英語に移入されて来たときの形態論的な工夫の痕跡を垣間見ることが出来るのである。

つまり英語に入った LCF は主としてラテン語の元の形の屈折語尾が落ち、時に発音変化を伴ったものである。

右端のコラムは他の LPref との結合の多様性を示唆したものであるが、形態論的な生産性 (productivity) の観点から、ある LCF は LPref の種類を多く取るが、他の LCF は接頭辞を取る可能性は低いことがわかる。さらに詳しくは次に述べる LCF とラテン語由来接頭辞との合成分布をみていくことにしたい。

### (9) LCF の合成分布

Spencer (1991) は歴史的にラテン系の接辞 *-ion* はアングロ・サクソン系の動詞には付加されない例として *\*breaktion* を上げて本稿でいう同一語根保持の原理に触れている。これが他の例ではどうであろうか。

LCF の合成においては同一語源の原理を保持しつつラテン語 Root である LCF がどのようなラテン系の接頭辞と結合され、またその分布はどのようなものであるかという点は興味深い。[Pref+[Root]] のスキーマにおいては比較的結合の頻度数の多い接頭辞とそうでない接頭辞があり、LCF の語形成においてはその生産性において程度の差のあることが推測される。例えば (15) のように *-ject* や *-mit* や *-pose* は以下のように多くの接頭辞と合成され、生産性 (productivity) が高いが、(16) の *-vide*, *-vive*, などでは生産性は低いといえよう。

- (15) a. *abject deject eject inject object project reject subject*  
 b. *admit commit emit permit remit submit transmit*  
 c. *compose depose expose inpose oppose propose repose suppose transpose*
- (16) a. *provide*  
 b. *survive revive*

これらの相を他の例にあたってさらに詳しく整理したものが次の表である<sup>15)</sup>。

[Table 3]

	ab-	ad-	con-	de-	dis-	ex-	in-	ob-	per-	pre-	pro-	re-	sub-	sur-	trans-	計
-cede		ok	ok			ok				ok		ok				5
-ceed											ok		ok			2
-ceive			ok	ok					ok			ok			ok	5
-claim		ok				ok					ok					3
-cur			ok					ok				ok				3
-dict						ok				ok						2
-duce		ok		ok			ok				ok	ok	ok			6
-duct	ok		ok	ok		ok					ok	ok				6
-fess			ok								ok					2
-fend				ok				ok				ok				3
-fer			ok	ok			ok			ok		ok			ok	6

-form			ok	ok					ok			ok			ok	5
-here		ok						ok								2
-ject	ok					ok	ok	ok			ok	ok	ok			7
-jure	ok		ok					ok		ok						4
-late	ok		ok					ok				ok				4
-lude		ok		ok		ok				ok						4
-mand			ok	ok								ok				3
-mit		ok	ok			ok		ok	ok				ok		ok	7
-pand						ok										1
-part		ok	ok	ok				ok								4
-pass			ok											ok		2
-pend		ok		ok												2
-port			ok	ok		ok	ok					ok			ok	6
-pose		ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok		ok	ok	ok	ok		ok	12
-prise												ok		ok		2
-quire		ok						ok				ok				3
-sent	ok	ok	ok									ok				4
-serve			ok	ok				ok		ok		ok				5
-sist		ok	ok	ok				ok		ok		ok	ok			7
-spect		ok				ok	ok		ok		ok	ok	ok			7
-spire		ok	ok			ok	ok		ok			ok			ok	7
-tact			ok					ok								2
-tain		ok	ok	ok					ok	ok			ok	ok		7
-tend		ok	ok			ok	ok									4
-tort			ok			ok						ok				3
-trude						ok	ok	ok			ok					4
-vade								ok		ok						2
-venge		ok										ok				2
-verse		ok	ok	ok				ok	ok			ok	ok			7
-vide											ok					1
-vive														ok		1
-voke			ok			ok	ok				ok	ok				5
-volve				ok		ok	ok					ok				4
計	5	18	25	17	1	17	18	10	10	6	11	26	9	3	7	183

この表は左の欄には比較的頻度数の多い CLF を 44 個、右欄にはラテン語由来接頭辞 (LPref) を 15 個配置して互いの組み合わせの可能性の可否について調査したものである。また, ok の印は左欄の CLF と右欄のラテン語由来接頭辞との結合が可能であり, かつ authentic な辞書に list されている語であることを示す。また右端の数字は CLF が右欄のどの LPref と合成され得るかについての分布状況とその合計数である。最下欄の合計数字はそれぞれの LPref が左欄の CLF と合成され得る語の場合の合計数をそれぞれ示している。

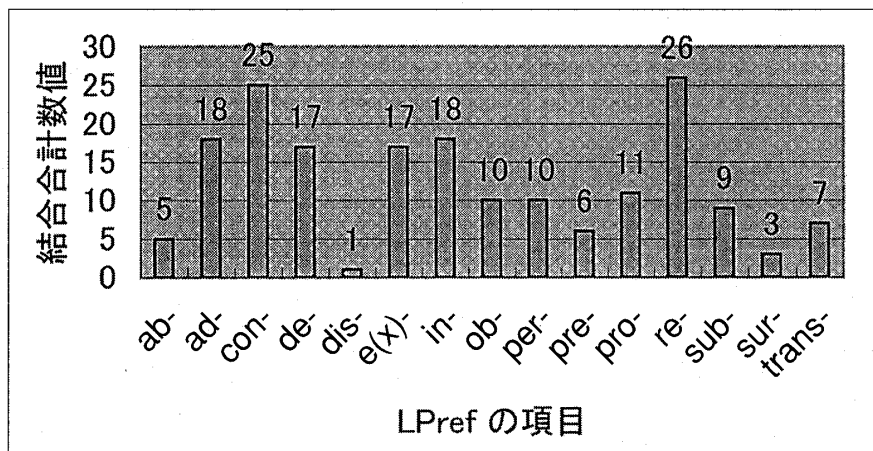
全体の合成語の数は 183 個になった。LPref については re- が最も多く, con (m)- がほぼ同数でつづいた。以下百分率で示すと LPref の合成語形成の頻度数の分布を抽出すると以下のものであった。

[Table 4]

LPref	Ab-	Ad-	Con-	De-	Dis-	Ex-	In-	Ob-	Per-	Pre-	Pro-	Re-	Sub-	Sur-	Trans-
合成 (183)	5	18	25	17	1	17	18	10	10	6	11	26	9	3	7
%	2.7	9.8	13.7	9.3	0.5	9.3	9.8	5.5	5.5	3.3	6.0	14.2	4.9	1.6	3.8

これをみると生産性の高いLPrefは *re-*(14.2%), *con(m)-*(13.7%), *ad-*(9.8%), *in-*(9.8%), *de-*(9.3%), *ex-*(9.3%) などであることが分かる。これを以下のようにグラフにしてみるとLPrefの分布の様子が分かる<sup>16)</sup>。

ラテン語由来動詞形成



また、上の [Table 3] から、LPref を多く取る LCF は *-pose*, *-mit*, *-ject*, *-sist*, *-spect*, *-spire*, *-tain*, *-verse* などであることを指摘しておきたい。

## (10) ま と め

英語の語形成をめぐる諸問題のうちラテン語由来動詞についての研究はまだ充分とはいえない。各種 authentic な辞書を見てもラテン語由来語根について list(記載) されている辞書はほとんどない。本稿ではもっとラテン語由来動詞の語根を辞書に取り上げるべきであることを提唱したい。

本稿ではまず第一に英語の語形成上の基本的なタイプを語彙形式 (LF:Lexical Form) 連結辞 (CF:Combining Form) 接辞形式 (AF:Affixal Form) の三種類に分け、それぞれの特徴を表にしてみた。ここで問題にしたラテン語動詞語根は [Root] ではあるが拘束形態素であり、語形成上のタイプとしては連結辞であることを明示した。

ラテン語由来動詞はその語形成要素は [Pref + [Root]] と記することができるが両要素ともラテン語語源であることが必要である。ここに「同一語源保持の原理」が働いていることを指摘した。例外は Hybrid として処理することができるがその数は多くない。またラテン語由来の動詞は非対格動詞ではなく、行為についての動作動詞 (activity verb) で、行為者 (Agent) のみ、あるいは

は行為者と被行為者 (Patient) を項として取る自動詞あるいは他動詞であることを指摘しておいた。

次に [Root] の位置を占めるラテン語由来の動詞語根の形態論的振る舞いの特徴について考察した。その結果、ラテン語由来の動詞語根は拘束形態素ではあるが、意味論的内容があり、強勢を取りえる CF であることを明らかにしておいた。また右方主要語原理 (Righthand Head Principle) と Percolation の原理が働いて右側の位置に来る [Root] が動詞である以上、前位に接頭辞が来て出来上がるラテン語由来の動詞は無標性 (unmarkedness) をもった動詞であるといえる。しかし強勢の位置が前方接辞にシフトして語形成過程における有標性 (markedness) が働いたとき品詞の転換が起ることはここに特筆しておいてよいであろう。

最後にラテン語由来動詞語根 (LCF) とラテン語由来接頭辞 (LPref) の結合実態を辞書を検索しながらその分布 (distribution) について調査し、語の生産性 (productivity) の観点からその統計的結果を明らかにしてみた。LCF のなかでは *-pose*, *-mit*, *-ject*, *-sist*, *-spect*, *-spire*, *-tain*, *-verse*, LPref のなかでは *re-*, *con(m)-*, *ad-*, *in-*, *de-*, *ex-* などが productivity が高いことが判明した。

#### 【注】

- 1) 構造主義はソシュール以来の 20 世紀言語学の潮流をつくっていったが言語変化の諸相を捉えるには形式主義的な構造記述だけではいかにも貧弱であることが最近の認知言語学や語彙疑念構造の研究などでますます明らかになってきている。
- 2) シェークスピアや聖書の *King James Authorized Version* による英語の波及に加えて大航海時代の経済的、社会的、政治的優位性がポルトガルやスペインなどラテン系のカトリックの国からゲルマン系のオランダやイングランドなどのプロテスタント系の国家の台頭が大きな役割を果たすようになった。
- 3) Pidgin や Creole は地球規模で広がっていったある言語が原住民言語と接触・混交して独特な言語を作り出したものである。19 世紀には民族の優劣の観念が支配していたため接触・混交に拠って成る言語は一段下に見られていたが、記述言語学の発想により客観的に対象言語を公平に記述していく姿勢が取られるはじめてから世界のさまざまな言語が同等の立場で研究されるに至った。現代は言語の普遍性あるいは類型学的な視点において Pidgin や Creole の言語も詳細に研究されるにいたっている。ラフカディオ・ハーンが既に 1885 年に言語学への関心をもって Louisiana の Creole French によって書かれた *Gombo Zhebes* という俚諺集の言語学的な解説が Creole 言語の研究として興味深い。
- 4) 例えば *American Heritage Dictionary, Fourth Edition (AHD4)* や *Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition (LDCE3)*
- 5) 例えば *Oxford Advanced Learner's Dictionary, Sixth Edition (OALD6)* や *Collins English Dictionary, Third Edition (CED3)*
- 6) 例えば (i) *underestimate, understare, undercharge, underfeed*; (ii) *overthrow, overwork, overfeed, overcharge*, (iii) *uphold, uphill, uplift, upgrade*; (iv) *download, downgrade, downwind, downcast*
- 7) 例えば *Anglo-* は LDCE3 では prefix と記載 (list) されている。ところが同じ LDCE3 で “combining form” の項を引くと, “a form of a word that has a meaning but cannot be used alone, and is used with other words to make new ones such as ‘Anglo’ meaning ‘English’” と出てくる。つまりこの辞書では *Anglo-* は prefix であり, かつ CF (combining form) でもあるという訳である。ここに morphology 上の重要な問題があると筆者は認識している。
- 8) ここで三種の複合語をそれぞれ (i) LF Compound, (ii) CF Compound (iii) AF Compound として理解しておきたい。
- 9) 同一語源保持の原理はラテン語由来動詞形成過程を考察する上で基本となる原理である。しかし長い年月の間に頻度数の多い語は語源同一というバリアーを越えて新たな語を形成していこうとする。

Hybrid といわれる現象が生じて来る所以である。

- 10) ここでは *uni-*, *duo-*, *bi-*, *tri-*, *quadri-*, *quinque-*, *tetra-* などの数量接頭辞は省いた。他にもギリシャ語にルーツをもつ接頭辞は省いた。
- 11) *formation* (<-form), *diction* (<-dict), *cursive* (<-cur), *option* (<-opt) など例はあるが相対的に後続の *latinate suffix* は限られている。
- 12) 例えば *e(x)-* は「外へ」の概念を表す以上, *expect* のみならず, *explore*, *emit*, *expire*, *exclude*, *exchange*, *explode*, *export*, *exploit*, *expose*, *express*, *extend*, *extrude*, *external*, *exterior*, などさまざまな LCF に付与されて造語を豊かにしている。
- 13) 例えば Anglo-Saxon prefix と Latinate root word との結合において *belabo(u)r*, *forejudge*, *undecieve*, などの例がある。
- 14) 他に *présent* --- *présent*, *recórd* --- *récord* *impórt* --- *ímport*, *expórt* --- *éxport* *contáct* --- *cóntact* など思いの外その種類は多い。
- 15) この表はすべての結合の例を示すことが目的でなく, 概ね傾向として LCF と LPref の合成の可能性を卑近な語例を authentic な辞書を参考にして作成したものである。
- 16) 分布を分かり易くするために棒グラフで示した。数字は小数点 1 位までにして後は四捨五入した。

### 【References】

#### [Dictionaries]

- American Heritage Dictionary, Fourth Edition* (AHD4), 2000. Boston: Houghton Mifflin Company.  
*COBUILD English Dictionary for Advanced Learners, Third Edition* (COBUILD3), 2001. London: Collins ELT.  
*Collins English Dictionary, Third Edition* (CED3), 1991. Aylesbury: Harper Collins.  
*Genius English Dictionary*, Konishi, Tomoshichi and Yasuyo Minamide (eds.) 2001, Tokyo: Taishukan.  
*Oxford English Dictionary, Second Edition* (OED2), 1989. Oxford: Oxford University Press.  
*Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition* (LDCE3), 1995. Harlow: Longman Group Ltd.  
*Oxford Advanced Learner's Dictionary, Sixth Edition* (OALD6), 2000. Oxford: Oxford University Press.  
*Random House Dictionary, Second Edition* (RHD2), 1983 New York: Random House.  
*Random House Webster's Dictionary of American English* 1997. New York: Random House.  
*Reader's Digest Oxford Wordfinder*, 1993. Oxford: Clarendon Press.  
*Webster's Third New International Dictionary of the English Language*. 1961. New York: Merriam.

#### [Bibliography]

- Adams, Valerie (1973) *An Introduction to Modern English Word-formation*, London: Longman.  
Aronoff, Mark (1992) "Stems in Latin Verbal Morphology", in Aronoff (1992 ed.) Albany: SUNY Press.  
Aronoff, Mark (1992) *Morphology Now*, Albany: State University of New York Press.  
Barber, Charles (1997) *Early Modern English*, Edinburgh: Edinburgh University Press.  
Bauer, Laurie (1983) *English Word-Formation*, Cambridge: Cambridge University Press.  
Bauer, Laurie (2001) *Morphological Productivity*, Cambridge: Cambridge University Press.  
Booij, Geert (1977) *Dutch Morphology*, Dordrecht: Foris Publications  
Bradley, Henry (1904) *The Making of English*, London: MacMillan. (Revised Edition; revised by S. Potter Tokyo: Seibido (1970)).  
Clark, Eve V. (1993) *The Lexicon in Acquisition*, Cambridge: CUP.  
Denning, Keith and William R. Leben (1995) *English Vocabulary Elements*, Oxford: Oxford University Press.  
Di Sciullo, Anna Maria and Edwin Williams (1987) *On the Definition of Word*, Cambridge: The MIT Press.  
Dressler, Wolfgang U. (1988) "Preferences vs. Strict Universals in Morphology: Word-Based Rules", in Hammond, Michael and Michael Noonan (eds.).  
Hammond, Michael and Michael Noonan (1988) *Theoretical Morphology - Approaches in Modern Linguistics-*, New York: Academic Press.  
Hermann, Paul (1920) *Prinzipien der Sprachgeschichte* (福本喜之助訳 (1976) 「言語史原理」講談社学術文



庫).

- Hopper & Traugott (1993) *Grammaticalization*, Cambridge: CUP.
- van der Hulst and Neilson Smith (1982) *The Structure of Phonological Representations, Part 1*, Dordrecht: Foris.
- Katamba, Francis (1993) *Morphology*, London: Macmillan.
- Katamba, Francis (1994) *English Words*, London: Routledge.
- Kiparsky, Paul (1982) "From Cyclic Phonology to Lexical Phonology" in van der Hulst and Smith (eds) (1982).
- Kodani, Shinichiro (2000) *English Words*, Kyoto: Ryuukoku Sousho.
- Lieber, Rochelle (1983) "Argument Linking and Compounding in English" *LI* 14, 251-286.
- Namiki, Takayasu (1985) *Gokeisei (Word Formation)*, Tokyo: Taishukan.
- Nishikawa, Morio (1997) "Morphologization and Combining Forms" *Memoirs of the Faculty of Education, Kumamoto University Vol. 46*. 207-223.
- Nishikawa, Morio (1998) "Settouji-Keisei to Bunnjouka-Genshou" (Remarks on Prefixation and Grammaticalization). *Memoirs of the Faculty of Education, Kumamoto University Vol. 47*. 87-99.
- Nishikawa, Morio (2001) "Affix and Combining Form" *Memoirs of the Faculty of Education, Kumamoto University Vol. 50*. 55-67.
- Oishi, Tsuyoshi (1988) *Keitairon (Morphology)*, Tokyo: Kaitakusha.
- O'Grady, William, Michael Dobrovosky and Francis Katamba (1987) *Contemporary Linguistics*, London: Longman.
- Quirk Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik, (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.
- Sapir, Edward (1921) *Language*, New York: Harcourt.
- Siegel, Dorothy (1979) *Topics in English Morphology*, New York: Garland.
- Selkirk, Elizabeth (1983) *The Syntax of Words*, Cambridge: MIT Press.
- Spencer, Andrew (1991) *Morphological Theory*, Oxford: Basil Blackwell.
- Trask, Robert L. (1996) *Historical Linguistics*, London: Arnold.